

道祖問答

芥川龍之介

青空文庫

天王寺てんのうじの別当べつとう、道命阿闍梨どうみょうあざりは、ひとりそつと床をぬけ出すと、経机きょうづくえの前へに

じりよつて、その上に乗っている法華経ほけきょう八の巻まきを灯あかりの下に繰りひろげた。

切り燈台の火は、花のような丁字ちやうじをむすびながら、明く螺鈿らでんの経机を照らしている。

耳にはいるのは几帳きちやうの向うに横になつてゐる和泉式部の寢息いすみしきぶであろう。春の夜の曹司ぞうしはただしんかんと更け渡つて、そのほかには鼠ねずみの啼く声さえも聞えない。

阿闍梨あざりは、白地の錦ふちの縁をとつた円座わらふだの上に座をしめながら、式部の眼のさめるのを憚はばかるように、中音ちゆうおんで静かに法華経を誦ずしはじめた。

これが、この男の日頃からの習慣である。身は、傳ふの大納言だいなごん藤原道綱の子と生れて、天台座主慈恵大僧正てんだいざすしえの弟子でしとなつたが、三業さんごうも修しゆせず、五戒ごかいも持した事はない。いや寧ろ「天あめが下したのいろいろのみ」と云う、Dandyの階級に属するような、生活さえもつづけている。が、不思議にも、そう云う生活のあい間には、必ずひとり法華経を讀誦どくじゆする。しかも阿闍梨自身は、少しもそれを矛盾むじゆんだと思つていないらしい。

現きやうに今日、和泉式部を訪れたのも、験者げんざとして来たのでは、勿論ない。ただこの好女こうじよの数の多い情人の一人として春宵しゆんしやうのつれづれを慰めるために忍んで来た。――それが、

まだ一番鶏いちばんどりも鳴かないのに、こつそり床をぬけ出して、酒臭くちびるい唇に、一切衆生皆いっさいしゆじようかいじ

成仏ようぶつどう道の妙經を誦誦しようとするのである。……

阿闍梨は編衫へんさんの襟を正して、專念に經を読んだ。

それが、どのくらいつづいたかわからない。が、暫くすると、切り燈台の火が、いつの間にか、少しずつ暗くなり出したのに気がついた。焰ほのおの先が青くなって、光がだんだん薄れて来る。と思うと、丁字ちようじのまわりが煤すすのたまつたように黒み出して、追々に火の形が糸ほどに細つてしまう。阿闍梨は、氣にして二三度燈心をかき立てた。けれども、暗くなる事は、依然として變りがない。

そればかりか、ふと氣がつくと、灯あかりの暗くなるのに従つて、切り燈台の向うの空氣が一つところ所ところだけ濃くなつて、それが次第に、影のような人の形になつて来る。阿闍梨は、思わず誦經どきようの声を断つた。――

「誰じゃ。」

すると、声に応じて、その影からぼやけた返事が伝つて来た。

「おゆるされ。これは、五条西の洞院どういんのほとりに住む翁おきなでござる。」

阿闍梨は、身を稍後ややあとへすべらせながら眸ひとみを凝らして、じつとその翁を見た。翁は經きよう

机つくえの向うに白の水干すいかんの袖を搔き合せて、仔細しさいらしく坐っている。朦朧もうろうとはしながらも、烏帽子えぼしの紐を長くむすび下げた物ごしは満更まんざら狐狸こりの変化へんげとも思われない。殊に黄色い紙を張った扇を持つているのが、灯あかりの暗いにも関らず氣高けだかくはつきりと眺められた。

「翁おきなとは何の翁じや。」

「おう、翁とばかりでは御合点ごがてんまいるまい。ありようは、五条の道祖神さえのかみでござる。」

「その道祖神が、何としてこれへ見えた。」

「御経うけたまを承わり申した嬉しさに、せめて一語ひとことなりとも御礼申そうとて、罷り出まかいでたのでござる。」

阿闍梨あせりは不審らしく眉をよせた。

「道命どうみょうが法華經を読み奉るのは、常の事じや。今宵に限った事ではない。」

「されば。」

道祖神さえのかみは、ちよいと語を切つて、種々しやうしやうたる黄髮こうはつの頭を、懶げものうに傾けながら不あいか相変わらず咳くような、かすかな声で、

「清くて読み奉らるる時には、上かみは梵天ぼんてん帝たい釈しゃくより下しもは恒河沙こうがしやの諸仏菩薩しよぶつまで、悉ことごとく聴聞ちやうもんせらるるものでござる。よつて翁は下賤げせんの悲しさに、御身おんみ近うまいる事もかない

申さぬ。今宵は——」と云いかけながら、急に皮肉な調子になって、「今宵は、御行水も遊ばされず、且つ女人の肌に触れられての御誦経でござれば、諸々の仏神も不浄を忌んで、このあたりへは現ぜられぬげに見え申した。されば、翁も心安う見参に入り、聴聞の御礼申そう便宜を、得たのでござる。」

「何とな。」

どうみようあざり

道命阿闍梨は、不機嫌らしく声をとがらせた。道祖神は、それにも気のつかない容

子で、

「されば、恵心の御房も、念仏読経四威儀を破る事なかれと仰せられた。翁の果報は、やがて御房の墮獄の悪趣と思召され、向後は……」

「黙れ。」

阿闍梨は、手頸にかけた水晶の念珠をまさぐりながら、鋭く翁の顔を一晒した。

「不肖ながら道命は、あらゆる経文論釈に眼を曝した。凡百の戒行徳目も修せなんだものはない。その方づれの申す事に気がつかぬうつけと思うか。」——が、道祖神は答えない。切り燈台のかげに蹲ったまま、じつと頭を垂れて、阿闍梨の語を、聞きすましているようである。

「よう聞けよ。生死しやうじそく涅槃ねはんと云い、煩惱ぼんのう即菩提そくぼだいと云うは、悉く己おのが身の仏ぶつ性を觀くわんずると云う意こころじや。己が肉身しやばは、三身即一の本覺ほんがく如来にょらい、煩惱業苦ぼんごうくの三道さんだうは、法身ほふしん般若はん若外脱にやげだつの三德さんとく、娑婆世界しやばは常寂光土じやうじやつこうどにひとしい。道命だうめいは無戒むがいの比丘びくじやが、既に三觀さんくわん三諦さんだい即一心いっしんの醍醐味だいごみを味得みとくした。よつて、和泉式部いずみしきぶも、道命だうめいが眼まなこには麻耶夫人まやふじんじや。男女なんによの交会くわいも万善ばんぜんの功德くんとくじや。われらが寢所しんじょには、久遠本地くおんほんじの諸法しよほふ、無作法身むさほつしんの諸仏等しよぶつどう、悉く影顯えいげんし給うぞよ。されば、道命だうめいが住所しよじょは靈鷲りやうじゆ宝土ほうどじや。その方づれ如しよき、小乘しよじやう臭糞しゆふんの持戒者みだいが、妄みだりに足を容いるべきの仏国ぶつこくでない。」

こう云つて阿闍梨あかぢは容かたちをあらためると、水晶すいしゆの念珠ねんじゆを振つて、苦々にがにがしげに叱りつけた。

「業畜ごうちく、急々きふに退き居のろ。」

すると、翁おきなは、黄いろい紙の扇あふぎを開いて、顔をさしかくすように思われたが、見る見る影ほたるが薄うすくなって、螢ほたるほどになった切り燈台ちやうだいの火と共に、消えるともなく、ふつと消える――と、遠くでかすかながら、勇ましい一番鷄いちばんどりの声こゑがした。

「春はあけぼの、ようよう白くなりゆく」時が来たのである。

(大正五年十二月十三日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集¹」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1995（平成7）年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utyama

校正：earthian

1998年11月11日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

道祖問答

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>